レポート　大浦信行氏の美術作品の検閲をめぐって

なぜ沖縄で「遠近を抱えて」か

「表現の自由」と「検閲問題」の本質は「天皇制問題」である

上原誠勇

私たち画廊沖縄では、大浦信行の連作版画「遠近を抱えて」14点の展示と、同名の映画「日本心中　針生一郎・日本を丸ごと抱え込んだ男」、「9・11―8・15　日本心中」の映画3本を上映し大浦信行展（2009年5月16日～31日）を行った。2009年の今年は、薩摩の琉球国侵略支配1609年からちょうど400年目を迎えることから、過去の歴史経緯をとり琉球（沖縄）人の「心性の在りか」と「主体性の検証」の手がかりになればとの想いから、企画（Install―1609）したものだった。大浦氏の作品「遠近を抱えて」は昭和天皇の肖像を題材に用い、日本の天皇制と日本近代の形成の再読をうながす内容の作品であり、沖縄および日本の近現代史を語るとき外せない（避けて通れない）重要な作品であると位置づけていた。

近代における明治政府による日本の西洋化、その渦中で進められた琉球王国の暴力的解体と日本化（植民地化）。二等国民扱いの琉球人。琉球独自の文化と言語の否定、天皇を神として崇め、琉球伝統の古信仰を否定された皇民化教育。日本本土の防波堤（捨て石）となった沖縄戦。住民を巻き込んだ地上戦と集団自決（新教科書における歴史改ざん問題）、昭和天皇による戦後処理と沖縄をめぐる琉球人区別と差別問題。GHQ＝マッカーサーと昭和天皇の会見における琉球諸島の米軍占領統治（25年～50年またはそれ以上の租借、昭和天皇が発した「昭和の沖縄処分」ともいえる「天皇メッセージ」（1947年―1979年米国公文書館にて発見）。沖縄の恒久的な米軍占領統治を決定付けたサンフランシスコ講和条約締結（1951年）。27年間に及ぶ基本的人権を無視した治外法権下の沖縄の米軍統治支配。日本本土の米軍基地縮小撤退と在沖縄米軍基地への移転と拡大強化。ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争の出撃拠点となった沖縄米軍基地。「沖縄が日本に復帰しなければ日本の戦後は終わらない」と宣言した佐藤総理の、沖縄の日本国への再併合（復帰―1972年）時の非核三原則の「嘘」と日米政府の「密約」。核も米軍事基地も要らない日本復帰」の「沖縄の声」をいとも簡単に無視した日本国民。「軍隊のない平和な島に返せ！」という沖縄の声」を軽視した日本政府による軍隊（自衛隊）の配備。在日米軍基地の75%をおしつけ、「経済振興」という名のアメ」をふりまく日本政府。巨額の「おもいやり予算」を米軍に提供し、アジア最大の米軍戦略基地化した不沈空母の沖縄島。米軍隊と沖縄県民は仲良く暮らしましょうと「よき隣人政策」を唱え、軍隊と共存、共生を推し進める日米政府。日米安保と軍事同盟強化再編の名の下で進められる沖縄本島北部の辺野古の巨大米軍基地建設計画。住民の意志と人権を無視し、日米両政府の踏み石的存在にされる軍事植民地化した沖縄。米国のアジア戦略に従順かつ無批判に従う日本政府。

軍事基地撤去を訴える「沖縄の真の声」は国会では届かない。平和憲法九条も沖縄においては空しい存在だ。1972年の日本再併合（復帰）後の、日本政府の「沖縄振興計画」は前述の構図を安定的に運用するための「アメとムチ」の政策にほかならない。沖縄が自立（自律）し、日本政府の公的資金投入が要らなくなり、政治経済が自立し、独自文化の発展した「主体性のある沖縄」は、日本政府および米政府にとって好ましくないのは明白である。常に外（日米政府）からコントロール可能な、無抵抗で「従順な沖縄」が都合よくふさわしいのである。

以上の琉球（沖縄）の歴史的経緯と現状を述べたが、なかでも歴史の闇に封印された「天皇メッセージ」は、沖縄の戦後史を決定した政治的、かつ重要な存在であり、「遠近を抱えて」は大いなる語り部になるであろうと期待したのであった。さらに、近代日本における琉球・沖縄の歴史的処遇から見える琉球人と大和人との天皇観の差異。さまざまな歴史事象を闇から引き出し、今日の光を当て薩摩侵略支配400年の節目に、未来のあるべき沖縄像を探るべく、その機会になればと試みたのであった。

さて、大浦信行展を開催するひと月前からすでに開催中であった沖縄県立博物館・美術館における「アトミックサンシャインの中へIN沖縄―日本国平和憲法九条下における戦後美術」展（2009年4月11日～5月17日）において、大浦信行作品「遠近を抱えて」が教育的配慮」などの理由から展示除外され、公立美術館の「作品検閲問題」「表現の自由」「天皇タブー」が地元のTVや新聞で連日大きく報道され話題になった。そのような騒ぎの中で画廊沖縄の大浦信行展のスタートとなった。連日のマスコミ報道も手伝い、県立の美術館が展示除外した事に対する、抗う展示会として開催された大浦信行展と誤解されたのも事実だった。

初日（6月16日）のオープニングにおいては作家本人の大浦信行氏を招いた。「表現の自由」を掲げ、「検閲」に対する「沖縄県立博物館・美術館長」への抗議と署名運動のために、急遽来沖した小倉利丸氏が飛び入り参加となった。先の「アトミックサンシャインの中へIN沖縄」のキュレーターの渡辺真也氏、県美術館指定管理者の担当者、県内新聞記者、共同通信社記者、その他、一般と地元美術関係者を含む40～50人がつめかけた。問題の「検閲除外」された作品展示のため、会場にはトーク開催前から異様な熱い雰囲気が漂っていた。しかし、企画展テーマの「近現代と天皇＝沖縄戦と天皇＝「天皇メッセージ」に議論は進展しなかった。何とか企画展の意図する方向へ話題が行くように進行役にあたったのだが、流れは、先の県立の美術館「アトミックサンシャインの中へIN沖縄」展で発生した、大浦作品の除外「検閲問題」と写真家比嘉豊光氏の「外された横断幕事件」へと話題が集中した。議論はダダイズムの定義にまで及ぶ広範囲にわたり、更に検閲騒ぎの真相と責任の所在をさぐる展開にまで至った。作家、キュレーター、論客、マスコミ、美術館関係者、フロアの一般人を交え、3時間半におよぶ大トークバトルのオープニングとなった。

終わってみれば、まことに残念な事に、作品「遠近を抱えて」を前にして、画廊の企画意図に沿った内容を話す場はすでに失っていた。今にして思えば、「検閲」や「表現の自由」に抗議する云々は、軍事植民地化された沖縄の現実から見れば、その問題は二の次である。より切実な問題を抱えた沖縄の現実があり、戦後がまだ終わっていない。敗戦64年目を迎えた現在、沖縄には日本国民が解決すべき「沖縄の戦後問題」が大きく横たわっている。その問題から目をそらすことなく、日本国民が戦後の解決すべき重要な問題として引き受けるかどうかが問われている。大浦作品「遠近を抱えて」はそのことも日本人に問い続けている。

終わりに、本稿を執筆している今日は戦後64年目の終戦記念日、2009年8月15日である。「太平洋戦争と戦後」「帝国軍部と天皇」「日本国民（天皇）の戦争責任」「アジア侵略と帝国日本軍」などの内容を特集した番組が終日テレビから流されている。「遠近を抱えて」をめぐる「表現の自由」と「検閲問題」の本質は「天皇制問題」である。この大浦作品「遠近を抱えて」が日本社会において、日常一般に公開され、それぞれの「天皇」と日本の近現代」を再考し、自問自答し、個々の内なる天皇像と歴史に向き合う事が出来ればと切望する。そうすることで、今日の日本人が日本近現代史を再読する機会となり、広くアジアにまたがる歴史の実相を真摯に捉え、未来への展望の扉が開かれる事を願ってやまない。

（画廊沖縄）

大浦信行氏から一言

問題の根底にあるのは、移植された制度としての日本近代の、さらなるその中の内なる制度としての「美術」が、未だ存立の根拠を見いだし得ないまま、今日に至っているという、その脆弱さによるものだと、ぼくは思っています。

それが、沖縄という戦後日本の矛盾が凝縮された場所で、改めて露呈したのだと思います。

問題の根は深いです。

（映画監督、美術家）

「遠近を抱えて」14点中の6点を掲載。中段の2点は一部カットしたことをお断りします。